

おわりに

「施設のあり方研究会」が発足したのが平成18年7月でしたから、早いもので2年9ヵ月の歳月が流れたこととなります。研究会は、公募委員を含めさまざまな福祉関係者からなる25人によりスタートしました。初めての会合で施設に対するイメージを伺ったところ、「もっと施設の機能を社会に還元すべきではないか」「入所者が自由に生きたいことを、何が邪魔しているのか」「施設に入る前の人生を継続するケアになっていないのではないか」いった率直な意見がでて、施設の職員としては胸に突き刺さる思いで聴いていたことを今でも覚えています。外部の目は、このように見ているのだと痛感するとともに、施設が地域と隔絶した存在ではなく、地域と一体となることが求められているのだと考えさせられた会の始まりでした。

こうして研究会は幕を開け、全体会議4回、事前準備会3回、ワーキング検討委員会8回、集中検討会2回、実に計17回の会合を重ねました。この中には、1泊2日の泊り込みまでして中間報告書に向けての最終取りまとめもしましたし、さらに、東葛地区、印旛・山武地区、君津地区の3地区において地域別意見交換会を開催し、研究会での検討内容

の説明と、参加者からのご意見を聴く機会を設けたりもしました。当時を振り返り、初年度の9ヵ月がいかに委員の皆様多大な御負担をおかけしたかがよくわかりましたし、同時に、皆様の熱意があったからこそ、次年度からのモデル事業につなげることができたのだと、今更ながら感謝しております。

モデル事業は「地域の拠点としての施設のあり方」と「施設のケアのあり方」の2つのテーマにしぼり、19・20年度の2ヵ年で合計8施設で行われました。モデル事業実施施設では職員への事前説明や年間計画をたてて実施していくなどして、1年を通して職員の皆様にもまた大変御負担があったかと思えます。施設の拠点では地域の方々から成る運営協議会を開催して協働事業に取り組んだり、地域と一体となった活動を展開していくなかで地域支援を行うなどしましたし、ケアのあり方では支援プランシートや記録表を活用してケアの見直しを図るなどして、いずれもすばらしい取り組みをされており、施設のもつ可能性をあらためて教えてもらいました。

今後も、県内の高齢者施設で「施設のあり方モデル」が継続していくためにも、これまでの8施設が築きあげたモデル事業の実績が大きな礎となり、励みになっていくものと確信しております。実施施設の皆様に

は、これからもさまざまな場面でご助言，お力添えをいただけますことを，お願い申し上げます。

最後に，この場をお借りして委員の皆様をはじめ，関係者，モデル事業を実施していただいた施設と職員の皆様に対し，これまでの御尽力に深く感謝するとともに，心からお礼申し上げます。

平成 21 年 3 月

施設のあり方研究会 会長 相 沢 毅